

研究所だより

第304号
2011年1月6日
発行：土佐清水市教育研究所
TEL 82-3015

<迎春・2011年>

謹んで新年のご祝辞を
申し上げます。

本年も宜しく
お願い致します。



<子どもに好かれる先生の5つの法則>—甲本 卓司 著

4, 自分を伸ばしてくれる先生が好き

(1)、優れた教育技術を身につける

子どもは誰だって、勉強(運動)ができるようになりたいと考えている。

例えば、跳び箱の開脚跳びなどは、できるかできないかがはっきりする。できない子に対して、教師が「別に跳び箱なんて跳べなくても大丈夫だよ」などと慰めても、子どもは全く嬉しくないだろう。子どもはみんなの前で友達と同じように跳びたいと内心は思っているのである。

子どもたちは、「勉強ができるようにしてくれる先生」「自分を伸ばしてくれる先生」が大好きなのだ。

教師は、できない子をできるようにする指導法を身につける努力をし続けなければならない。もし、校内に力のある同僚がいたら、お願いして授業をみてもらえばよい。または、見せてもらうのもよいだろう。

しかし、残念ながらそれが出来ない状況に置かれている場合がある。その時には、【サークルに通い、模擬授業をして教育技術を身につける】ことが一番である。

(2)、インターネットで指導法を検索する。

向山洋一氏は、一人一人が持っている有効な教育技術を全ての教師の共有財産にするべきだと考え、20年以上も前に、「教育技術法則化運動」を立ち上げた。現在では、TOSSランド(<http://www.tos-land.net/>)というインターネット上のポータルサイトに形を変えて発展している。

例えば、漢字がなかなか覚えられない子がいて悩んでいる場合は、検索欄に「漢字指導」と入力すれば、19件もヒットする。(2007年10月現在)

この中で子どもに適した指導法を選び、印刷してノートに張って授業に臨むことで、効果的な指導法を手軽に追試することが出来る。

このようにして、教師は、子どもの学力を伸ばすこと、勉強ができない子をできるようにさせることを第一に考え学び続ける必要があるだろう。

(3)、子どものよいところを伸ばす

教師は誰だって、子どもの力を伸ばしたいと考えている。日々努力している人も多いだろう。しかし、その方法が正しくなければ子どもは伸びていかない。

次の2つの指導方法を考えてみてほしい。

1. 良いところを伸ばす。
2. 欠点を直す。

この2つの対照的な考え方は、どちらがよいのだろうか。向山洋一氏は次のように述べている。



これは、「良いところを伸ばす」ことが正しいのだ。人間とは不思議なもので、「良いところ」を認められ、ほめられると、さらに努力する。自分にも心地よいものだから、「努力する」などと思わなくても努力してしまう。良いところは、ほめられるとどんどん伸びていくのである。

さらに次のように続けている。

そして「良いところが伸びた結果」として、それまでの「欠点」も、少しずつなくなっていく。つまり、「良いところを伸ばす」ことが、「欠点を直す」ことにもなっていくのである。

教師は子どもの欠点に目が行きがちである。その欠点を何とか直そうと躍起になる。それが教師の使命だと思い込んでしまう。欠点を直すという指導方針は、効果がないというだけではない。むしろ逆効果になることさえある。特に勉強が苦手な子や特別支援を要する子に劣等感を植えつけることにもつながるのである。

<土佐清水市の伝説4(民話)>土佐清水市史より

【加久見左衛門の怪力】

加久見左衛門は加久見の城主で豪力無双の武士でもあった。

加久見左衛門が、晩年、金剛福寺に参詣をしたときのことである。お寺をあらちらと見物していた加久見左衛門は、亀呼び場のくずれた石の鳥居の所まで来た。そしてじっとその石を眺めて、「わたしも、若い時は、これくらいの石は物の数とも思わなかったが、年が寄って力が落ちたので、さあどうだろうか。」と独り言を言いながら、2~30人でも動かすににくい鳥居の柱を軽々と担いだ。そうして2町程歩いて仁王門のあたりへ置いた。

「これは弘法大師様が一夜に彫刻せられたが、お建てにならないで置かれたものである。きっと深いわけがあることだろう。こんなにちりちりにしておくのはもったいないことである。どれ、もとの所へ持って行こうか。」とまた担いで行こうとした。すると住持がこのさまを見て、「ちょっとお待ちください。その石をもとの所へお返しになるお考えのようですがこの石を一人で担いでここまで運んできたのは、まったく古今無双の大力でございます。そのままそこへ置いて下さい。加久見殿の形見の石と名づけ、後の世まで語り伝えましょう。この石は、別に何処へも捨てるではありません。この山に置く以上は、きっと御大師の御心にかなうこととございましょう。」と言った。

加久見左衛門は笑って、「住持が仰せられるのならそういたしましょうか。」と言ってそのままにしておいた。この柱石は今もある。参詣の老若、見るたびにびっくりしているということである。